



郷 土 の か ぜ

仙 台 市 民 図 書 館 郷土資料コーナーから

ジャズの王様、ルイ・アームストロングが仙台で演奏した建物

仙台市民図書館郷土資料担当 渡邊 啓市

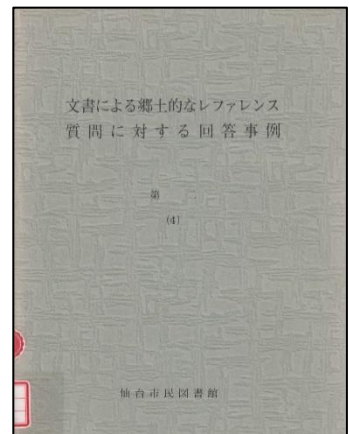
ジャズ界で最も愛されたアーティストの一人として人気を集めたルイ・アームストロングは、かつて仙台を訪れ、演奏したことがありました。演奏したのが進駐軍の「将校クラブ」だったことは知られていましたが、具体的な場所は不明でした。

ところが、2023(令和5)年3月29日付「河北新報」朝刊に、郷土史家の千葉富士男さんがルイ・アームストロングの仙台での演奏場所を突き止めた、という記事が掲載されました。その記事によると、千葉さんは、米国在住歴のある知人から、神社のような特異な外観の将校クラブの写真を渡され、所在地を尋ねられたそうです。千葉さんは進駐軍使用の地図と1943(昭和18)年当時の仙台の地図を照らし合わせ、その場所が花京院にあった「^{やしろ}社会館」ではないかと考えました。そして、終戦直後の花京院を知る方に尋ねると、その場所は終戦前、新興宗教団体が入る施設で、戦後に進駐軍から接收され「将校クラブ」として利用されたということが判明。さらに親交のあるジャズマンたちから当時の記憶を聴き取るなどして、ここが演奏会場だと突き止めたそうです。

先日、郷土資料コーナーをよく利用される方から、その建物に類似した写真を1955(昭和30)年7月21日付「河北新報」朝刊の広告欄で見つけたが、進駐軍の「将校クラブ」と同じ建物なのかという質問を受けました。その広告には、その建物は「仙台観光温泉」という施設で、100人は入れる大浴槽と舞台付300畳の大広間があり、ステージではいろいろな催しものが開かれると書かれています。

国立国会図書館デジタルコレクションで「仙台観光温泉」をキーワードにして検索すると、「新都市」という雑誌の中の、仙都国際観光株式会社という会社の広告に「仙台観光温泉」が載っていました。その広告には、東北初のリゾートホテルで1969(昭和44)年の火災により解体された「松島パークホテル」(設計はチェコの建築家ヤン・レツルで広島原爆ドームも彼の設計)や仙台名画座などの名前も並んでおり、いくつかの施設を経営していたようです。

さらに、この「仙台観光温泉」については、当館が1986年に発行した『文書による郷土的なレファレンス 質問に対する回答事例第2-4』の「木村奎太郎の文学碑」の項目の文中に「…今の仙台観光温泉(のちボーリングクラブ)に南隣した光禅寺通り四の邸に一〇年ほど住んだ」との記載がありました。そして、1967(昭和42)年の住宅地図と照らし合わせたところ、千葉さんが突き止めた花京院の場所にはボーリングセンターがありました。また、国立国会図書館デジタルコレクションで「仙台ボーリング」をキーワードにして検索したところ、1966(昭和41)年の『宮城県地方労働委員会年報』の中にも、仙都国際観光株式会社の概要に「仙台ボーリングセンター」という名前があり、千葉さんによれば、その外観から「お寺ボール」と利用者に呼ばれ、親しまれたとのことでした。



<参考図書>

『文書による郷土的なレファレンス 質問に対する回答事例 第2-4』仙台市民図書館／編 仙台市民図書館
S015セ

■ある日のレファレンスから

先日、電話で「赤穂浪士四十七士の一人、寺坂吉右衛門が泉区市名坂に来たと聞いたが本当なのか、もし本当なら何の目的で来たのか」という質問を受けました。寺坂は赤穂浪士四十七士の唯一の生き残りの人として知られている人物です。

調べてみると『仙台・泉の散歩手帖』（木村孝文／著）の中に、七北田小学校の東隣に実相寺があり、寺坂の墓と墓碑が建っていることが書かれていました。寺坂は討ち入り後の引揚げの途中に大石内蔵助の命を受け、他の四十六士と別れ、国元に報告するために使わされたといい、その後、江戸に帰って自首したが、時効をもって赦され、出家して諸国行脚をしたとのこと。その行脚の途中、仙台藩の七北田刑場にさしかかり、刑死者の供養をしようと志し、七北田宿に簡単な住居を建てて念仏堂に通い、供養してきたといわれ、彼の没後、所持した遺書、手紙、日誌等により寺坂吉右衛門であったことがわかったそうです。

ちなみに、寺坂吉右衛門のお墓は、東京都港区、福岡県八女市、鹿児島県出水市など、全国各地にあるとされています。

■新着図書紹介(郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書)

『埴輪ガイドブック 埴輪の世界』

橋本 博文／著 新泉社 R210.3 ハ

埴輪で有名なものといえば、昨年、国宝指定 50 周年を迎えた“^{けいこう}掛甲の^{ぶしじん}武人”や、文房具グッズにもなっている“踊る埴輪(埴輪 踊る人々)”でしょうか。“笑う埴輪(埴輪 笑う男子)”を見たときは、かわいいなあ…と思いましたが、驚いたことに、古代の笑いには威嚇の意味があるのだそうです。

この本では、「おしゃれだった古墳時代の男性」「太刀・弓を持つ女性埴輪」「渡来人をかたどった埴輪」など、興味を引かれるテーマが並んでいて、埴輪の種類や役割などについて書かれています。みなさんも、埴輪が語る古墳時代をのぞいてみてはいかがでしょうか。



『『烏組隊長細谷十太夫』を読む』

小西 幸雄／編著 ミヤオビパブリッシング S28.9ホ

仙台藩の下級武士であった細谷十太夫は、戊辰戦争時に衝撃隊を編成して、その隊長として活躍した方です。全員が黒装束だったため、烏組と呼ばれ、勝ち続けた数は30余り。常に先鋒に立ち、新政府軍から恐れられたといえます。そして晩年は仏門に入り、龍雲院の住職として林子平の墓を守り、戊辰戦争で戦死した将兵たちの霊を弔いました。

この本は、1931(昭和 6)年に出版され、細谷の伝記として最もまとまっているといわれる『烏組隊長細谷十太夫 全』(江北散士／編)の全文に筆者ができるだけ詳細な解説を加え、彼の生涯を分かりやすく取りまとめた一冊です。



■編集後記■ 今年は昭和が始まってから 100 年という節目の年です。その他にも、日本のラジオ放送開始 100 年、三島由紀夫生誕 100 年、第二次世界大戦終結 80 年、などの歴史的記念の年でもあります。郷土資料コーナーには、昭和時代の仙台の風景を撮影した写真集や地図、河北新報の新聞記事が読めるマイクロフィルムなどいろいろ取り揃えていますので、昭和についての調べものがありましたら、4階カウンターまで気軽にお声がけください。また今後、これらの資料の展示や関連イベントの開催ができればと考えています。

発行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地：仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585